○アオイゴケ類（原　寛）Hiroshi HARA: On *Dichondra* of Japan

西日本の暖地に見られるアオイゴケが *Dichondra repens* Forster et Forster (1776) と同じかどうかという点はかなり前から気にかかっていたので，数年来この小草を鉢に植えて眺めてきた。しかし何分にもこの類は中南米やオーケストラリアなどに色々の型があって，南半球の資料が不足している日本では解決が困難であった。1961 年秋 Tharp & Johnston によって主に北米産の種類が再検討され，それまで不明確であった *D. repens*, *D. sericea* Swartz, *D. evolvulacea* (L.f.) Britton などの基準型もある程度はっきりした。多少種の切り方が細かいところもあるが，大体 15 種が認められ，アオイゴケは *Dichondra micrantha* Urban (1924) として扱われている。この種は Cuba から記載され，Texas, Jamaica, Mexico から New Caledonia, 中南支，台湾，琉球，日本に分布しているとみなされている。アオイゴケは済州島にも産し，またフィリピンおよびビルマから *D. repens* として報告さているものも同じ型と推察される。

アオイゴケは全体小形で葉は通常腎円形，長さ 3—15 mm，横径 5—25 mm，上面にも初めは多少伏毛があり，花梗は葉柄より短いのが普通で長さ 2—6 mm，花後上部で急に下曲し，花は径 3 mm ばかり，萼は長さ約 1.5 mm で果時には 2—2.5 mm，萼裂片は長倒卵形で先端部には白鬚毛が多く，花冠は長さ 1.5 mm 強あり萼よりやや長く，裂片は長楕円形鈍頭，果実は長さ約 2 mm で萼より少し超出する。これを Tharp & Johnston の *D. micrantha* の記載と比べると，花梗が短かく，花冠裂片は鈍頭，花はやや少さく，花柱は短かいなど多少符合しない点があるが，これが中米産とアジア産との違いかどうかは判らない。

真の *D. repens* Forst. et Forst. は New Zealand や Australia に限って産し，各部やや大形で花は径 5—6 mm，萼裂片は先がとがり長さ 4—5 mm あり果実よりも少し長くなり，花梗は糸状で大体まっすぐで，アオイゴケとはかなり異ったものである。*D. evolvulacea* (L.f.) Britton の基準形は南米 Columbia から記載されたもので，葉下面に毛が密生し花梗は糸状に長く著しくは下曲せず萼裂片は細く，*D. sericea* Sw. に近く同様かも知れないという。北米東南部に多い *D. carolinensis* Michx. (*D. repens* var. *carolinensis* Choisy) も花梗は長く（通常 8—20 mm）立ち，先で急に屈曲せず，萼は果時 3.5—6 mm に達し果実より長い点でちがう。

ここでもう一つ問題になるのは近年日本に輸入され芝生代用として栽植されているダイコンドラと呼ばれる植物である。これはアオイゴケより強壮大形で栽培も易しく，葉は卵円形をおび先端の凹み方がやや少なく上面は初めから無毛，花梗は長さ 3—8 (13) mm で花後屈曲し，花も少し大きく経 3.5—5 mm，花冠裂片は萼片より長く約 2 mm，葯は初め暗紫色，花柱は長さ 1 mm，果実は長さ 2—2.5 mm で萼より超出する。これもやはり *D. micrantha* に最も近いが花冠が明らかに萼より長い点などで疑問が残ってい

る。しかしハワイで Galenga grass と呼んで芝生用にうえられているものも彼等は *D. micrantha* に入れている。

ダイコンドラとアオイゴケは非常に近縁なものであるが，同時に両者は全く同じではない。もしダイコンドラの方が *D. micrantha* の基準形に近いものであるならば，アジア産のアオイゴケはその変種ぐらいに扱ってもよいように思えるが，資料が十分でないので結論は差し控えておくことにする。　　(東京大学理学部植物学教室)

○ 北岳の遺存植物 (植松春雄) Haruo UEMATU : On relic plants of Mt. Kitadake

北岳が現在の日本における最も注目すべき遺存的要素の宝庫であることは何人も認めることであろう。この原因は北岳の地質が秩父古生層であることから判明するように，この山の生成年代が古く，第 3 紀や第 4 紀時代に発生起源をもつか，もしくはその頃の分布を拡大したものも十分に遺存し得る歴史をもつし，日本列島上で富士山についでの 3192 m という高海抜をもつということも北方系要素の遺存には極めて好都合の条件であったと考えられる。なおここでいう遺存種と称するのは前記した第3紀もしくは第4紀に主として北方から南下して遺存したものの中で，現在その分布が高山頂とか特定の低海抜の場所に相当の不連続を示しつつ分布しているものに限定したい。

ところで遺存種のうち代表的な北岳周辺の固有種としてはキタダケヨモギ，キタダケトラノオ，サンプクリンドウ，キタダケナズナ，キタダケカニツリ，キタダケイチゴツナギ，キタダケデンダなどがあげられ中でもキタダケソウは北海道，朝鮮，樺太にその類縁のものがあり，本州には北岳山頂付近の極めて限定された地区をのぞいては全く分布していないのである。これらのものは過去に広く日本列島上にひろがっていたものが，かろうじて北岳山頂付近にだけ遺存しているもので古い起源をもつものと考えられる。北岳を中心にした地域で分化しているものに *Melandryum* 属がある。西山温泉付近の岩壁や少々とんで秩父の金峯山麓方面にまで分布するビランジ，北岳下野呂川や鳳凰山麓小武川等の河原や岩場に目立つオオビランジ，鳳凰山地蔵岳山頂附近に多いタカネビランジ，北岳の吊尾根付近に目立つシロバナタカネビランジというようにいろいろの形のものが多い。この仲間で他地域に分布するものとしては北海道にカムイビランジがあるだけで，そのきわだった分化は注目に価する。

北岳の遺存種の宝庫は冬季における北西の季節風の影響からか，主として稜線の東側にその群落が発達していて，湿性の御花畑をつくる北アルプスの山岳とは異り，どちらかというと乾性の御花畑をつくっている場合が多く，ハクサンオオバコ，ウルップソウ，イワイチョウ，コマクサなどの見当らないのも興味深い。南アルプスの北に位置する八が岳は北アルプスの湿性遺存種と南アルプスの乾性のものとの漸移地帯だとも言え，ウルップソウやコマクサもここでは目立っている。